



TITLE:

# 明末宗教的反亂の一考察：礦徒と宗教結社の結合形態

AUTHOR(S):

大澤, 顯浩

---

CITATION:

大澤, 顯浩. 明末宗教的反亂の一考察：礦徒と宗教結社の結合形態. 東洋史研究 1985, 44(1): 45-76

ISSUE DATE:

1985-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154104>

RIGHT:

# 明末宗教的反亂の一考察

——礦徒と宗教結社の結合形態——

大 澤 顯 浩

## 序

### 第一章 喬濟時案の背景

#### (一) 流 民

#### (二) 礦 徒

### 第二章 喬濟時案について

#### (一) 概 略

#### (二) 組織形態

#### (三) 宗教的内容

## 結 語

## 序

45

明代後期は中國近世社會の大きな變動期であつた。そしてまた、民衆宗教運動にとつても一つの劃期であつた。寶卷宗教としての無爲教（羅教）の盛行や種々の史料に見られる様々な教派の名はその實際を物語っている。<sup>(1)</sup> こうした民衆宗教の盛行の背景には、民衆の在り方の變化さらには社會構造自體の變化もみることができよう。そして、明末の宗教的反亂

の多發も當時の時代の在り方と關連させてとらえることはできないだろうか。

嘉靖三十九年（一五六〇）、章煥は有名な經略中原疏で次のように述べている。<sup>(2)</sup>

臣惟うに、中原の患は妖民盜賊の二者のみ。妖黨の興るは數十年前より始まる。妖民は假るに詐術を以てし、愚民を誑惑す。愚民の利する所は富田利益なり、妖民の逐う所は溷雜淫汚なるのみ。人心一たび蠱<sup>まどわ</sup>され妖説遂に行わる。愚者は福を求め智者は禍を避け、富者は家を傾けて以て結納し、貧者は身を以て奴婢と爲す。然れどもまだ其の邪謀に與る者は有らず。此れ一變なり。數年以來、民窮し財盡き、邑に安居の戸無く、里に樂業の家無し。是に於て妖言盛行して根盤放蔓す。又此れ一變なり。往時山東の寇は燕・趙に入らず、河北の賊は河南を踰えず。虜變・倭變より後、盡く各省の兵を徴して應援す、而して椎埋の惡少、忘命・連盜、往往其の中に竄入す。異黨の人邂逅して相い親しみ、一呼すれば響應す。此れ又一變なり。中原數省、其人ことさらに多く死を輕んじ氣を尙ぶ。彼れ各處の狂狡を見て相い聚りて其の地方の虛實を談じ、攘臂喋血して遂に逆謀を起こす。此れ又一變なり。今群妖群盜合して一途と爲る。盜黨は妖言に藉りて以て民を惑わし、而して妖人は群盜に倚りて以て衆を劫す。閃倏常なく踪跡すべからず。此れ今日の大患なり。故に山東西、河南北、南北直隸、陝西、湖廣漸く一黨を成す。盜賊往來し、至る所に主有りて所在家を成す、逐捕の後、去向を知る莫し。

ここには「群妖群盜合爲一途」という狀況への變化が興味深く說かれている。未だ反亂を冀うようなものではないが富者貧者が熱狂的に宗教活動に加わった時期、そして鄉村の窮乏と「妖言」が盛行した時期、さらに「虜變倭變」以後の募兵に惡少、亡命が入りこみ、遂には中原數省に波及するようになった時期をへて、今では「群妖」と「群盜」の提攜が出現し、今日の大患となっているという。ことに章煥は「妖黨」の變質を組織成立と關連づけて述べ、これが明末の宗教的反亂の多發の説明となっている點が注目される。

こうした「群妖群盜」の提攜關係は、鈴木中正氏の示した民間武力派と宗教組織との共闘という圖式を想起させる。<sup>(3)</sup>

かし、鈴木氏は王朝革命期における社會全體の武裝化という狀況に集團の安全確保という宗教派側の提攜の要因をみようとしたが、武力派側の提攜に對する利點ははっきりしていない。鈴木氏の言う民間武力派は游手無賴といわれるものも含めて、窮乏化した農村社會から析出されたものとしてとらえられるが、<sup>(4)</sup>さらに社會の武裝化に對する人民の自衛のための武裝という印象もうける。それに對して章煥の言う群盜の場合は鄉村を離れた非農民層が想定されており、民間武力派と必ずしも同一視はできないかもしれないが、歴史的 성격には共通するものがある。また、この明末期は無賴と呼ばれる社會層の活動が活潑化した時期でもあり、民間武力派・群盜とはこの無賴・遊民層の活動の一端として理解することも可能である。<sup>(5)</sup>

本稿でとりあげる喬濟時案は、このような非農民層の活動即ち礦徒と宗教結社との結合を示す一例であり、萬曆五年（一五七七）、河南南陽府、所謂三省交界地の一角で起こった宗教的反亂の未遂事件である。

## 第一章 喬濟時案の背景

喬濟時案の發生した南陽府は流民問題でよく知られ、所謂成化年間の荆襄の亂の後には鄰接する鄖陽・荊州・襄陽・漢中等所謂三省交界の諸府と共に鄖陽巡撫の管轄下におかれた。この鄖陽巡撫の管内の諸府はともに共通した地理的、社會的性格をもっており、以下本稿では鄖臺地區と總稱することにする。<sup>(6)</sup>喬濟時案を分析する爲にはまずこの南陽府の地域性を考える必要がある。はじめに流民をとりあげ、次いで礦徒について考えてみたい。

### (一) 流 民

流民が問題化したのは永樂中期以降のことであり回籍主義との矛盾が顯著となった成化年間に頂點に達した。そして荆襄の亂の後、附籍主義がとられて一時的安靜をみたものの結局は根本的解決は爲されなかった。<sup>(7)</sup>

横田整三氏は流亡の徒が激發したのは永樂中期以後であり、荆襄地方への人口流入については嶺南地方を除く殆ど全ての地方からみられたといい、ことに山西・陝西・北直隸を重視している。實際に流民の原籍地をみれば、原傑、開設荆襄職官疏には、その招撫した流民は「山東・山西・陝西・江西・四川・河南・湖廣及び南北直隸府衛軍民等の籍」を持つといい、また『萬曆鄖陽府志』卷一四 風俗には「陝西の民五、江西の民四、德（湖廣德安府）、黃（湖廣黃州府）、吳、蜀、山東、河南北の民二、土着の民二、皆な各おの其の俗を以て俗と爲す」とある。

これらの流民が鄖臺地區へ流入した原因は何であつたのだろうか。『英宗實錄』卷一五一 正統十二年三月戊子には、河南鄖州流民馬貴等言えらく、臣等三百五十餘戸、原と山東、山西に居り、地狹く民衆く、徭役繁重なるに因り、逃移して此に至る。

とあり、「地狹民衆」と「徭役繁重」の二點を原因に鄖州へ移つたことを述べている。また弘治元年（一四八八）の日附のある馬文昇、巡撫事には、河南・山西・山東・四川・陝西の人々が「或因逃避糧差、或因畏當軍匠、及因本處地方荒旱」のため漢中府へ逃住したものが十萬を下らなかつたとあり、さらに特殊な例として北方異民族の影響も挙げられる。<sup>(11)</sup> 以上の様に饑饉・災害・差役・税糧などの諸因が史料に散見するが、この根底にあるのは「地狹民衆」という鄖州流民馬貴の言に示された狀況であろう。樊樹志氏は、明清時代の流民は耕地に對する過剰人口であり、地主經濟の畸形的發展や土地集中、人口發展と耕地とのバランスが崩れたこと等と密接な關係があるという。<sup>(12)</sup> 各地に固有の原因を探る必要はあるにせよ、流民の發生する背景には耕地と人口とのバランスの崩壊という農村における矛盾があつたことは否めない。

なお、<sup>(13)</sup> 觸れるべきものに宗教と關係したものである。劉千斤の亂、所謂第一次荆襄の亂を鎮壓した王恕の處置地方奏狀には、

各處の流民、僧道人等、往往にして其の中に逃移し、強を用つて菴を結び産を立つ。

とあるように流民の中には僧道も含まれており、また、『憲宗實錄』卷二五には「善友」の存在も指摘されているし、<sup>(14)</sup> 永

樂年間の湖廣隨州・棗陽縣では各處の逃民の中に「左道惑衆者」がいたことが知られる。<sup>(15)</sup>これら流民の中における宗教活動はあまり詳しくは知られていないが、山西から流來したものの中に「端公」と呼ばれる宗教者が存在した。

訪じ得たるに、西安・鳳翔・延安・漢中等府の地方、多く山西等處の流來せる人民有り、呼びて端公・居士等項の名目と爲し、持齋誦經し、善事を禮脩し、内に姦惡を懷き、妄りに白蓮教、宣明教と稱し、神像を挾持し、幻術を播弄し、妖言を捏造し、専ら禍福利害を以て人民を恐動す。城市鄉村の愚夫愚婦、翕然としてこれを信じ、延請供奉して至らざる所なし。資するに財帛を以てし、結びて婚姻を爲し、歲時社を開きて招集し、遠近の人百十群を爲し、夜聚曉散して人心を扇惑す。官司明知するも禁約を行わず。以て承訛襲舛して、遠近尤に效らうを致す。<sup>(16)</sup>

ここにみられる端公の存在は陝西におけるものであるが、鄖臺地區にも端公がみられ、徐恪、議處鄖陽地方疏には「粟端公」という稱が見える。端公は『大明律』禮律 祭祀 禁止師巫邪術の條にもみえ、男巫の稱と解される。<sup>(17)</sup>なお他に當時鄖臺地區で「妖賊」といわれたものに嘉靖元年の馬隆、隆慶二年の何冕の事件などがあつた。<sup>(18)</sup>

では、鄖臺地區の流民の状況はどのようなものであつたろうか。成化初の王恕、處置地方奏狀には、襄陽府や荊州府の各地の状況を論じて、<sup>(20)</sup>

俱に各處の流移せる人戸、并びに逃軍逃囚人有り、家小を帶領し、彼に在りて耕種し、食を趁<sup>\*</sup>いて躲住し、遞年結構して非を爲せり。

とあり、各處からの流民は妻（家小）を伴い、耕作に従事していたことが知られる。その家族形態については李翺子の亂（第二次荆襄の亂）を鎮壓した項忠の撫流民疏には、<sup>(21)</sup> 謫戍された「賊黨」は一〇、二〇〇餘に對し、その家屬は五九、〇〇〇餘とあり、賊黨一人につき六人弱の家屬があつたことがわかる。これらの數字は實際に附籍、謫戍された時のものであり、かなり正確なものと思われ、流民の家族構成は必ずしも小さなものではなく、定着するにつれ大きくなる傾向がうかがえる。例えば附籍政策をとり荆襄の亂の最終的な處理をした原傑の處置流民疏によれば、<sup>(22)</sup> 流民一一三、三一七戸、四三

八、六四四丁口を取勘したことが見えるが、その内譯として「近年逃來」の流民は一六、六六三戸、四五、八九二丁口、「本分營生」の流民は九六、六五四戸、三九二、七五二丁口、とあり、「近年逃來」の流民は、一戸當り二・七五口、「本分營生」の流民は、一戸當り、四・〇六口となり、その土地に定着した流民の方が一戸につき一口以上多くなっている。

即ち、圖式化すれば、未だその地に定着していない流民の家族構成は、夫婦二人乃至一人程度であつたが、其處で生活を營むようになる頃には四人家族となっており、項忠のいう「賊黨」が概ね七人の家族であつたのと對照的である。項忠の言うような回籍政策に對して反抗した者はやはりより多くの家族を持ち、恐らく其處においてかなり定着した生活をしていたのであろう。以上からこの地區における流民の定着の可能性をうかがうことができよう。また、正徳初、何鑑の清查した荊、襄、南陽、漢中等處の流民は、二三五、六〇〇餘戸、七三九、六〇〇餘口であり、<sup>(23)</sup>一戸當り三・一三口となる。更に嘉靖初の鄖陽巡撫であつた徐蕃の去思碑記には「時得戸二十二萬、丁口五十七萬有奇」<sup>(24)</sup>とあり、平均して一戸當り二・五九口程度である。これらがともに「近年逃來」の流民の平均二・七五口に近いのも概ね新たに流入してきた流民を對象にした爲といえよう。このような零細な規模の戸が廣範に分布することから、賦役負擔に耐え得る戸をあみ出す便法としてとられたものが朋戸であらう。合戸自體には禁令があつたが、それは差役の不均衡化をもたらずものとして認識されたからであり、この場合とは方向を異にする。但し、これも數十年後には同様の弊害を生じることとなつた<sup>(25)</sup>。

それでは、鄖臺地區の流民は如何なる生活を營んでいたのであろうか。多くはやはり農業を營んだと考えられる。丘濬は荊州・襄陽・南陽の三府を論じて次の様にいう。

臣以えらく、今日の疆域、これを觀るに、則ち此の三郡は實に我が朝天下の中となすなり、天下の田、南方は水多  
く、北方は陸多し、今此の三郡蓋し水陸を兼ねてこれ有るなり、南人、水耕を利とし、北人、陸種を利とす。而して  
南北流民此に僑寓する者、他郡に比して多となす<sup>(26)</sup>。

即ち、北方系南方系の二種の農業が可能であり、流民は他に比して多かつたという。そして流民の中には開墾して土地を

手に入れるものもいた。<sup>(27)</sup>しかしながら、流民のすべてが土地を手に入れて定着し得たわけではなく、後來の者ほど條件も悪くなったと思われ、王府や勢豪の佃戸となったり寺觀に隠れたものをはじめ、礦徒の存在も指摘されている。例えば、項忠、撫流民疏に<sup>(28)</sup>

光化縣の陳長子の如きは、籍はこれ有りといえども、然れども山を占めること四十餘里、無賴一千餘衆を招聚し、爭鬪劫殺、日としてこれ無きはなし。久居の故を以て遣らざる可けんや。

とあるように無賴一千餘を聚めるものもいた。これは「久居の故」とあるように原居の住民が流民を吸収したことがわかる。また、

官庄巨室、深山大寺、佃戸髮僧を隱藏し、占愒して發せざると、及び流民の中、前に仍りて躲避潛住し、或いは頑を恃み險を負み、清查供報に服せざる者の若きは例に照らして、問いて邊遠に發して軍に充て、窩藏隱蔽の人は罪を同じくせん。<sup>(29)</sup>

とあるように、佃戸や私度僧として巨室、大寺に隱藏されたこともあった。殊に均州では、差役を逃れる爲に太和山の佃戸となる者が多かったといわれ、<sup>(30)</sup>流民もこれらの中に含まれたであろうことは想像に難くない。

嘉靖末の鄖陽巡撫吳桂芳、條陳民瘼疏に、<sup>(31)</sup>各地に潛居する商人や遷民をはじめとして、

舊と已に附籍せると、及び暫時來往して貿易し、或いは工匠・雜藝の賃店居住する者は、妄りに騷擾するを行うを得ざるを除くの外、其餘の娶りて室家有り、房屋を置有し、田地を典種し、營運年多にして勢い遷るを重かるに在る者は、務めて挨門逐戸實に従りて聞報し、官に到らんことを要む。

とあるように附籍の對象とすべき様々な人々の生活状況を記している。これらは必ずしも流民に限られないが、工匠雜藝の者で賃店居住している者や、當地にきて長年にわたり家庭をもち家屋を買い田地を耕作している者などはかつての流民の定着した形である可能性があろう。その一方で、房間を賃貸させていた者もいたわけで「窩主」とはこのようなもの



含むかもしれない。また、『英宗實錄』卷一六 正統元年四月甲子には、南陽府の鄧州・内郷等の州縣や湖廣の均州・光化等の縣では、人が少なく荒地が残っているために、

各處の客商、洪武・永樂の間より、此に潛居して妻を娶り子を生み、家業を成す者有り。鄉村に叢聚して號して客朋と爲す。差役に當らず鈐轄する所無し。

と述べるように、早くから客商が住みついていたことがみえるが、南陽府一帯は四通八達の地といわれ、商人にとっては便がよかつたらしい。王士性『廣志繹』卷三には、河南の他の地方では水運に不便なのに對して、南陽の水系は南流して漢水へつながり、商賈はこれを利としたと記されている。<sup>(32)</sup>

## (二) 礦 徒

明代の礦業では、銀・銅・鐵の三種が重要であつたが、とくに銀鑛の生産は完全に國家の統制を受け、開採、封閉の政策も一定せず、私的に採掘、製煉を行う者も多かつた。<sup>(33)</sup> 礦賊・礦徒と呼ばれたのはこのような私的業者で、礦徒といえは常に銀が問題とされた。礦徒の問題が顯在化するのには正統年間（一四三六―四九）の頃からで、<sup>(34)</sup> その根本にあつたのは銀經濟の發展である。銀使用が解禁されたのはやはり英宗の即位後のことであり、<sup>(35)</sup> 礦徒に對する禁令が正統年間以降になつてみられることは通底する現象と思われる。『條例備考』兵部卷八 挨礦徒以止糾聚の條には、

各處の礦徒、正徳初年より起こり、十年の後より盛んなり、礦山の阿（附？）近左右の地方の者窩主と爲り、南北直隸、河南地方の者はこれに附し、數は數千を下らざるものあり。假るに盜礦の名を以てし、便に遇わば輒ち肆方に劫掠す。

とあり、正徳年間は何らかの轉換期があつたかのように述べているが、これを同時代の江南における廣範な離農現象を説く何良俊『四友齋叢説』<sup>(37)</sup>の記事と重ね合わせた時、十六世紀以降の中國社會の變質の一面が浮び上がってくるように思われる。當時の礦業について李洵氏は、當時、礦業は手工業に比して大きな勞働力の受容が可能であり、それほど多様な技

術も要さず、土地を離れた農民に適していた。盗礦の禁令はあったが、流民が大規模に發生した時期には各地の銀礦開發は流民の生活手段となった、というように評價している。<sup>(38)</sup>

礦徒の組織としては萬曆半ばの山西、五臺の張守清の例がよく知られており、亡命三千餘をあつめ、頭子即ち礦頭を二百餘名おくとする形態をとっていた。<sup>(39)</sup>つまり各礦頭の下に約十五人の礦夫がいたこととなる。そして、礦徒の節制に従わないものは杖殺するという勢威をもって臨んでいた。同様の例は雲南にもあり、「義夫者、即採礦之人、惟礦頭約束者也」という關係が見られた。また四川では、主事・行事・掌事などの名が立てられた例もあった。<sup>(41)</sup>張守清の場合は宗室と姻戚關係をもち、保長にもなるというように地域に大きな勢力を振るつたが、<sup>(42)</sup>礦徒のリーダーには地域の有力者や商人が多く見られたようである。『世宗實錄』卷一九四の郭勛の建議によれば「家業殷實者」を礦甲<sup>(43)</sup>（礦頭）に「熟知礦脈者」を礦夫にあてようとしたが、これは礦徒一般にもあてはまったことと思われる。『義烏縣志』卷八には、永康の鹽商施文六が、銀礦を發見して人々を集めて採礦した經緯が記されており、礦徒の形成過程を知る上でも興味深い。さらに雲南の例では『廣志釋』卷五に、

其の先、未だ硎を成さざれば則ち一切の工作、公私の用度の費は、皆硎頭これに任ず。硎大なれば或いは用の千百金に至る者あり。

とあるように、巨額の費用を硎頭が辦じていたことも知られる。

それではこの礦頭の支配の強さは何によるものであろうか。例えば、雲南では次のような狀況が指摘されている。

其の洞夫は皆な洞頭に召集されて其の家に養贍さる。然れども亦た本省の貧民、遠くは則ち川貴の遊食無頼の子なり。每洞多く二百餘人を過ぎずして止むのみ。<sup>(45)</sup>

ここでは洞夫となった貧民や無頼は洞頭の下で完全に養われていることがみえる。前述の「硎頭—義夫」の場合も同様であらう。このような形態は喬濟時案にもみられ、おそらく各地で廣くみられたと思われる。このように食・住・給與・罰

則等の各面で完全に礦徒を保護、統制下におくことができたからこゝで、礦頭は實效のある強力な支配を保つことができたのであろう。<sup>(46)</sup> また、礦業の性質上技術と經驗が大きく物を言うため、現場の指導者である礦頭に對して強力なリーダーシップが與えられたと考えられる。當時の礦業生産の形態については、『天工開物』などによりある程度知ることができる。<sup>(48)</sup> 例えば、鐵爐について記す『徽州府志』によれば、一つの爐につき、約四、五十人が分擔して晝夜交替で冶金をしており、その他に採掘・燃料關係の人夫を含めればさらに多くの人間がいたという。<sup>(49)</sup> これは先の張守清の場合の礦頭一人當り約十五人という規模に照らせば、一つの爐に礦頭三人ほどが一組となって晝夜交替の作業をしていたということとなる。<sup>(50)</sup> 先の張守清の集團は三千餘の亡命を集めるほどの大きなものであったが、弘治初の刑部尚書の何喬新、題爲裨補治道事は當時の礦徒の規模について、

近年以來、河南・浙江・福建の有等の奸頑の徒、嗜利玩法し、往往にして兇徒を聚集す。少き者は二、三百人、多き者は七、八百人銀鑛を強採し、甚しきは險阻に憑據して官軍を拒敵し、地方を搔擾す。

と記し、二百人から八百人程度の集團を爲していたことがわかる。さらに、萬曆半ばには南陽府の礦徒は千人單位で聚つているともいわれていた。<sup>(51)</sup> 崇禎年間、明末の農民反亂の對策として、楊嗣昌は開採を主張し礦甲の編成を説いたが、それは五百人を一甲とするものであった。<sup>(52)</sup> また、礦徒は近隣の住民とも密接な關係をもっていたようである。嘉靖初、王廷相は山東の礦徒の對策として塞洞を嚴にすることを述べ、次いで近礦の民を保察すべきであるという。

夫れ、今の礦徒は多く四方より來たる者なり、必ず近礦の家を得て以て住歇の處と爲す。斯のごとくせば蹤跡隱蔽して糾聚成すべし。然らざれば則ち敗露に易く、彼れ烏くんぞ敢えて肆然に之を爲さんや。故に次いで當に近礦の民を保察すべし。これをして十家もて保と爲し、保ごとに長有らしめ、十保もて總と爲し、總ごとに保正有らしめ、保の中をして各おの相い覺察せしめん。<sup>(53)</sup>

と、礦徒は四方からやって來たもので、近礦の家を據點としているから近礦の民を保察すべきであるという、なかには後

述のように、食料や用具の補給を近礦の住民に仰いでいたものもあったと思われる。

では、鄖臺地區における礦徒の状況は如何なるものであったか。萬曆二十四年（一五九六）八月、當時の鄖陽巡撫の馬鳴鑾は所謂礦税に反對して南陽府の状況を次のように述べる。

河南南陽の若きは則ち所謂四通八達<sup>(54)</sup>の地なり。礦徒偶し一たび嘯聚せば輒ち千を以て計う。今、此の風を聞きて聚りて採を待つ者は數千を下らず。

即ち、南陽府は地理的條件から四方に通じており、礦徒が聚集しやすいという。實際に南陽府では天順年間から礦徒が問題とされていたよう<sup>(55)</sup>で、古くから銀の盜掘を爲すものの存在が知られていた。また成化初の項忠、善後十事疏<sup>(56)</sup>には、

河南の盧（氏）・嵩・永寧・內鄉・浙川・鎮平、陝西の商（州）・洛（南）・金（州）・洵（陽）、湖廣の鄖・均（州）・上津

の諸境、山に礦多く、故に流民竊礦を以て聚まる。巡礦の官吏は敢えて誰何するなく、至だしくは交通して以て利を分かつ。宜しく礦禁を嚴にすべし。

とある。また、『皇明條法事類纂』卷三三 常人盜倉庫錢糧 盜掘銀礦枷號充軍の條には、

巡撫陝西右副都御史項忠奏言すらく、陝西終南山一帶は、河の盧南・盧氏・永寧等縣の地方に接連し、俱に銀礦有り。常に本處の豪民により各處の逃軍逃民・餘舍・旗校人等を糾合して開掘さる。

とあり、同じく、

潼關衛舍餘の黃玘等の如きは、成化五年四月内、銀沙を偷みて事發われ、問擬したるに、枷號滿日、宣府に解發して哨瞭せしめんとあり。未だ配所に到らずして又復た逃回し、聚衆して偷竊す。有等の近山無籍の徒の賊徒に結合するに及び、平時は則ち糧飯器具を資助し、事發われれば則ち事情を走報す。玩法の黨惡、肆にして忌憚なし。

とあるように、其の地の「豪民」が中心となって各處の逃軍逃民等を糾合して銀礦の盜掘をしていた。さらにそれらの中には「近山無籍の徒」と密接な關係を保持して様々な助力を獲たものもいた。<sup>(57)</sup>この無籍の徒とは言うまでもなく流民のこ

とである。萬曆當時の河南西南部の礦徒の姿を『廣志繹』卷三は次のように記している。

南召、盧氏の間、多く礦徒有り。長鎗大矢もて、裹足纏頭して、専ら山を鑿つを以て業と爲し、殺人もて生と爲し、毛葫蘆と號す。其の技最も悍く、其の人千百群と爲し、角腦を以てこれを束ねる。角腦とは即ち頭目の謂なり。

これは南召縣から盧氏縣にかけての山區の礦徒のことで、毛葫蘆というのは一種の山民であろうが、<sup>(58)</sup>盜礦をその生業となす集團が存在しており、「角腦」と呼ばれる首領が統轄していたことがわかる。

『大明一統文武諸司衙門官制』<sup>(59)</sup>によれば、鄖臺地區の近邊で礦徒の存在がみられるのは永寧・嵩・盧氏（以上河南府）、桐柏（南陽府）、魯山・寶豐（汝州）、鎮安（西安府）の各縣で、河南西南部は正統年間の葉宗留の亂で有名な浙江處州府とならんで礦徒が問題とされた地域であった。これらから、鄖臺地區には多くの礦洞が存在し、これに頼って生活する流民も多量いたであろうことが推測される。

## 第二章 喬濟時案について

「妖逆喬濟時」の事件については、當時鄖陽巡撫であった徐學謨『徐氏海隅集』外編卷之續五の「題南陽府提獲妖逆喬濟時疏」<sup>(60)</sup>によってその詳細を知ることができる。この事件は、二つの異なった系統の組織の提携が見られた點で特徴的である。一つは龔志尙、張麟を中心とする集團であって、教義を主導する立場にあるものであり、他は喬濟時を中心とする礦徒の集團である。まずその概略を述べ、次いでその組織と宗教内容をとりあげよう。

### (一) 概略

龔志尙は南陽縣の人で南陽を中心に嘉靖末年から活動をしていたようである。隆慶元年（一五六七）になって、龔志尙は直隸廣平府に到り、張麟と知りあい、南陽で新たに結社活動を始めたのであったが、その教説は、張麟のもたらしたもの

で金盆李氏信仰や趙王出世の教説が含まれていた。喬濟時は湖北の隨州から南陽府桐柏縣に流寓した人物で萬曆五年の事件當時四十七歳であった、そして桐柏縣の圍山に銀礦を産出することから、そこに山庄を置買し、捕盜老人となつて祕かに私利を得ることを企圖する。そして周一和と共に「角腦」となつて銀礦の盜掘をする一方で「妖言」を稱えた。<sup>(61)</sup>隆慶元年には喬濟時らも龔志尙らの會に参加していた。そこでは「俱隨會喫齋、號爲白蓮社會、日夜焚香拜斗」という活動がみられた。この時喬濟時らと共に白蓮社會に加わつた人々は、喬濟時の下の礦頭にあたる人々であり、礦徒の集團の中堅に位置する人々であつたと思われる。その他にも唐縣や泌陽縣の信徒もおり、この時期に教勢は擴大したと思われる。こうした活動の活潑化をうけて張麟らは更に「妖言」を發展させて「青帝眞君・九土神君・紫陽眞君」のような神格を倡え、また遊歴してきた四川泰山廟の羅道士（羅中川）とも知り合い、そして喬濟時を「天罡星」であるといい、「領袖」に推して彼の手下の礦徒の組織化を圖ろうとした。

そして、活動を續けるうちに「趙王後代出世」の教説を具體化する動きが現われ、萬曆四年（一五七六）末には四川の羅道士らの部隊が到着するのを待つて、鎮平縣・唐縣・南召縣・舞陽縣の諸處で一齊に蜂起し、潼關に趙王を迎えにいこうという計畫をたてる。そして武器の製造等の準備をしていたところ、萬曆五年正月二十日鎮平縣鳳陽店の甲長の察知するところとなつた。喬濟時は隨州や汝寧府、西平縣など各地を轉々として逃れたが、五月二十一日葉縣で捕えられた。しかし、張麟、龔志尙ら宗教面での指導者は遂に捕えられずに終つた。以上が喬濟時案の概略である。

## （二）組織形態

喬濟時案とは流民の大量に流入した鄭臺地區における宗教組織が礦徒の集團と結合して蜂起を企圖した事件であつた。この兩者の結合形態について酒井忠夫氏は、礦徒は下部組織であつたとの見解を示している。<sup>(62)</sup>しかし、礦徒は必ずしも宗教結社の下部を構成したものでなく、獨立した組織をもつて行動しており、上下關係というよりむしろ提携關係という

べき形態をとっていたようである。またこの事件は、山區の開発という歴史的條件を踏まえたもので、礦徒の存在や多數の流民の流入を背景に持ち、組織形態にもそれが反映している。

喬濟時は桐柏縣の圍山に銀礦を産出するのを知り、そこで山庄を買い、ひそかに洞口に供給して營利をはかった。同時に「捕盜老人」というものにもなり、地域のボス的存在となったと思われる、さらに周一和と共に「角腦」となり、礦夫を糾合して自身も礦山の經營に乗り出した。以上は嘉靖末年頃までの活動である。ここでいう「私自供給洞口營利」とは、後述の張仲仕、劉住兒のように礦徒を對象とする商業を営んだことをいうのであろう。『廣志繹』卷五に、「商賈は則ち酤者・屠者・漁者・採者、其の礦外に環居するに任す」とあるような「商賈」の活動が礦山の近邊でみられたと思われる。また喬濟時の山庄には「圍山庄羊圈」というものもあり、食用としての羊も飼っていた。なお山庄の規模については、周一和の山庄のように數十人を收容できるものもあった。<sup>(63)</sup>このように主として商業活動を通じて利を獲て、さらに礦山の經營にのり出したのであるが、喬濟時が捕えられた時に賞として用意されたその家産、生畜はおよそ銀一五五兩であった。<sup>(64)</sup>また喬濟時の家には家人の王臣や雇工人の袁和尚、傭工の喬濟朗がいたことがみえる。

一方、宗教側の龔志尙と張麟は、和福とその弟和弼や盧貢元・張朝用・郝曜らとともに、張麟の唱える黃石遺書の敎説——趙王出世と金盆李家信仰をもとに會をつくり、和弼を會主として組織化をはじめた。さらに新しく齊國平・陳大邦・張勤らがこれに加わった。陳大邦は「平素竊礦有勇」とあるように礦徒であったが、「如今會主和弼、陳大邦等糾人同做好事」とあるように和弼の系統に屬する人物で喬濟時とは並記されることもない。張勤は、

張勤、原と木匠に係る。外に在りて人の與に木器を做造し、專一に趙王出世等の情を揚説す。

とあるように、もと「木匠」であり、南陽に流れてきた。そして木匠という仕事を利用して敎説を流布しており、別に「張勤素憤説話」とも記されている。以上が龔志尙の組織の中核となった人々で喬濟時らはこのあとに加わっているが、両者が同時に史料の上で並記されることは殆んどなく、平素、礦徒側と宗教派との連絡が密接であったとは思われない。

僅かに連絡係と覺しき陳茂や趙惟禮などが喬濟時らと接觸しているにとどまるのみである。

喬濟時が組織に加わったのは、隆慶元年、彼が三十七歳の時のことであるが、同時に加わったとされ、名の擧がっている者は六十六名、殆んどが礦徒側と關係があると思われる人々である。こうして兩者の合したこの結社は「白蓮社會」と號し、焚香拜斗を事とする活動を行なう。

一方、宗教組織の結合原理の根底にあったのは「合同」「號令」の授與であつた。<sup>(65)</sup> 龔志尚と張麟は教勢の擴大をうけて、趙王出世の敎説に加えて天命思想や末劫思想、そして「青帝眞君・九土神君・紫陽眞君」という道敎的神格等を内容とする「妖言」を寫し、盧貢元・和福らに一張ずつ散與して「在家燒香供奉」させた。このように信徒には、合同や號令が付與され、各々供奉していたのである。その内容は趙王出世を記したものと思われ、

同に世業を扶け、齊しく富貴を受け、共に太平の樂を享け、輩輩公侯の位を失わず。

というような「妖言」に對應して付與されたものであらう。例えば、萬曆四年末、蜂起の前に齊國平に與えられた合同には、

和弼、又、前の妖言に照らして合同文書一紙を掣寫し齊國平に付與す。各おの收執して燒香供奉す。

と記されており、劉住兒・張仲仕・王友に與えられた小頭領の號令には「奉天承命、興國除憂、救民於水火之中、置之於磐石之上……」という文句があつた。この内容からも合同とは入信許可證で、號令とは辭令書と解され、その付與は組織の中核を占めた者を對象としたものと思われる。但し、蜂起を豫定して會の主だった者に與えられることが多いようである。即ち萬曆四年十二月になつて、陳大邦に「合同頭領文書」、齊國平には「合同文書」がそれぞれ付與され、また十二月には合同・號令が與えられて喬濟時は「總頭領」とされ、劉住兒・張仲仕・王友は「小頭領」とされた。この後さらに喬濟時を通じて十三人にも與えられ、合計三十四張の合同が授與されている。これは初期の、隆慶元年當時、和福・盧貢元等に對して散與され「燒香供奉」したものと明らかに異なつた性格をもち、蜂起に對するものであるのは明白であ



る。なお、龔志尙らの組織の擴大には合同・號令の付與の他に、現世的利益に訴えるものもあり、「妖書」を付與して疾病をはらうというような呪術的醫療も利用されたと思われる。<sup>(66)</sup>また、宗教組織の運営はやはり獻金によっていたやうで「和福、盧貢元等と各おの錢糧を出だし、張麟・龔志尙の費用に與う」とあり、和福、盧貢元らが教主の張麟・龔志尙の二人に費用を醸出していたことがわかる。但し、礦徒の側でも土地を典賣して絹を寄付した王友の例もあるが、これは日常の費用ではない。<sup>(67)</sup>

さらにこの後、四川泰山廟の道士羅中川もこの結社に加わり、「趙王出世」の教説を受入れ、四川の三寨の人々をひきつれて呼應すると協力を言明している。<sup>(68)</sup>この羅道士は諸方を巡っていた道士であり、四川でどれだけ組織だった活動をしていたかは疑問もあるが、龔志尙らが四川と共同して蜂起を圖ったことがわかる。

このような情勢をみて龔志尙は喬濟時を領袖にかつぎ出そうとする。

龔志尙は喬濟時が以前から礦盜をはたらき手下も多くいることから領袖に推そうとして、大徒弟の唐縣の人趙惟禮を平市店に往かせた。しかし、濟時は不在であつたのでその手下の火夫王文慶にこういった。今、趙王が出世する。張老爺は、喬老人は天罡星だといわれる。そこで私が會いに來た。兵を率いて趙王を迎えに起とう、と。しかし、王國瑞がそこにいたのだが濟時も白蓮教社で喫齋していることを知らず、趙惟禮に對して、あの方はそんなことを信じてないのじゃないか、それどころかあんたをつかまえてしまふよ、といった。趙惟禮は言を聽いてかえっていった。<sup>(69)</sup>

ここでは、龔志尙が喬濟時を領袖に推そうとした理由は、はっきりと武力蜂起にあることがわかる。そして、さらに興味深いのは、龔志尙の使いの大徒弟の趙惟禮は、王國瑞は識っている、喬濟時とは面識がないこと、喬濟時の集團にいた王國瑞は、そしておそらく火夫の王文慶も喬濟時が白蓮教社に加わっていたことを全く知らなかったことである。つまり、この時点では喬濟時は宗教活動にあまり深く關與していなかったと思われるし、また、礦徒組織のある一定の層以上しか「白蓮教社」には加わっていなかったことが推測される。恐らく、喬濟時の手下の火夫王文慶は白蓮教社とは何の關

係も持っていなかったであろう。それに對し、王國瑞は、龔志尙より合同を與えられており、萬曆四年十二月には、張仲仕・劉住兒・王友と共に龔志尙の使いの趙惟禮・屈眞全を家に迎えたように、家を構えていたことも知られている。勿論王文慶の名は合同を與えられた者の中にはみえない。實際に、宗教側から連絡係によつて、合同・號令を付與されたのは、劉住兒・王友・張仲仕の小頭領とされた三人や、周一和・羅河などの六人で、安孔性らの合同十三張は喬濟時を介して付與された。いわば、宗教面においても喬濟時の指導性を認めたわけで、宗教結社の影響も安孔性らに對しては間接的なものとならざるを得ないし、「總頭領」と直接接觸できる層となれば數量的にも自ずと範圍は限定されてくる。つまり、合同による礦徒集團に對するとりこみ策は、王友ら小頭領いわば礦頭のレベルにとどまったものといえる。以上のことは、礦徒組織全體が宗教結社の直接の影響下にあったのではなく、礦頭層を通じての間接的な影響を與えるにとどまったであろうことを推測させる。家をもち家族をもち、一定の時間的餘裕をもった礦頭層は宗教結社と關係を持つことができ、一般礦夫は必ずしも直接龔志尙らの宗教結社と結びついていたわけではないと思われる。

それでは、礦徒集團の内部ではどういう關係が存在していたのだろうか。具體的には張仲仕（張四）・劉住兒と礦徒との間の關係が擧げられる。即ち、

名を知られざる流徒三十餘人有り、本店張四・劉住兒店內に在りて酒飯を買食し、出入して、黃山等洞を劫取せんと揚言す。周一和、專一に礦賊を窩住し、以て居民の驚擾を致す。

とあるが、別に張四・劉住兒は「店戸張四・劉住兒」とも記され、喬濟時の集團には礦徒に對して酒飯の面倒をみる「店戸」という宿屋兼商店のようなものがあつた。さらに劉住兒らは、摘發をうけた後、周一和の山庄に逃れた數十人に對して、

劉住兒は又不合にも張仲仕と飲食を買辦し、與に各おの食用に供送す。

ともみられることから、商業活動にも關係しており、日常的に礦徒を世話していたと考えられる。喬濟時の最初の「私

自供給洞口營利」というのも同様の活動と思われる。この関係は清代の乾隆十七年（一七五二）湖北羅田縣の山地でおこった馬朝柱の事件でみられた、開拓農民を手引きしていた商店經營者の「護寨的」に類似しており、山區開發の一つの形態を暗示させる。山區で商店を經營して流通経路をおさえることは礦徒に大きな影響を與えたに違いない。

「趙王出世」の教説は萬曆四年末になり急速に具體化し蜂起計畫が立てられた。合同・號令が多く付與されたのもこの時期である。十二月十八日、龔志尙らは喬濟時を彼の家に訪ねる。

龔志尙・屈眞全が喬濟時に言うには、羅中川らの来る日を期して、和弼・陳大邦の一隊は鎮平で起ち、樂時貴・黃古倉の一隊は唐縣で起ち、梁國才の一隊は隱山の南の祖師廟で起ち、喬濟時・周一和一隊は平市店で起ち、千頃・潘禿子の一隊は舞陽縣で起つ。正月十六日の川兵の旗が到るのを待ってともに潼關にいき趙王をお迎えしよう、と。<sup>(71)</sup>

この蜂起計畫は組織の擴大範圍を示すものと解され、南陽府東部にわたっていることがわかる。唐縣でのリーダーは樂時貴と黃古倉であった。黃古倉は泌陽縣の人であり、樂時貴は唐縣の人である。ともに隆慶元年に白蓮社會に加わっており、樂は萬曆四年十二月に龔志尙と共に喬濟時の家を訪ねた一人でもあった。唐縣から桐柏縣までの伴をしたと考えられる。鎮平縣での蜂起を率いるのは和弼と陳大邦である。彼らは極く初期からの信徒で最も龔志尙らと近かった。これは地理的な面からみてもいい。蜂起計畫の中で鎮平は最も南陽縣に近く、早くから接觸していたのではなからうか。陳大邦は先述の如く喬濟時とは別系統である。桐柏縣の平市店では喬濟時、周一和が任にあたった。彼らは礦徒の頭目であったが、龔志尙らの組織に加わる以前から何らかの独自の宗教的活動をしていた、さらに舞陽縣では、千頃・潘禿子らの蜂起が豫定されていたが、彼らについてはよくわかっていない。また、これらの行動部隊の中には、龔志尙、張麟の姿がみえない。彼らは單なる宗教上の權威として第一線からは退いたのであろうか。摘發をうけた後もいちちやく逃亡したように、當時の鄖陽巡撫徐學謨は保定に檄を送って龔志尙・張麟の搜索を依頼している。<sup>(72)</sup> こうした蜂起計畫の點からみても、喬濟時らの礦徒集團と龔志尙らの組織は宗教性によって一貫されたものではないように思われる。

萬曆五年正月九日、喬濟時は人々を集めるために、平市店の張仲仕の家で「還願宰殺」を口實にして酒席を催した。<sup>(73)</sup>これは主に平市店での蜂起グループが集まったものと思われ、多くは礦徒と思われる者である、和弼・陳大邦・樂時貴・千頃などの名はみえないが、郝曜・陳茂・黃古倉らは集まったものの中に見える、ここで喬濟時は、

私は合同・號令をいただき總頭目となった。二月十五日を待つて起ち、潼關に趙王をお迎えしよう。你らもみな心をあわせ共に大事を成そうではないか。<sup>(74)</sup>

といひ蜂起計畫を明らかにする。この集まりは礦徒集團に對してはじめて計畫を明らかにし、獨自に結束を固めるために開かれたもので、そこには龔志尙・張麟らは見えず、宗教派の指導性はみられないようである。

喬濟時は「天罡星」といわれて總頭領とされたが、<sup>(75)</sup>その礦徒の集團の規模はどの程度であつたろうか。彼は「礦兵三千」を持つていたと稱された。しかし、先に喬濟時と共に結社に参加した者は六十餘名であり、その各々が既述の張守清の例の如く十五人程の配下を持つとすれば概ね千人前後の數が考えられる。さらに、瞿九思『萬曆武功錄』卷一 河南 白蓮教喬濟時曹翕列傳に記す、

(龔) 志尙……迺ち旦莫(喬)濟時に過從して遊び、而して里中の惡少年も亦た此に由りて濟時に歸し、殺牲して鼓舞し、これを尊ぶこと神の如しと云う。

というように里中の惡少年も喬濟時の活動に加わつていたと考えられる。以上は、先述の馬鳴鑾の言にみえる規模と概ね一致し、實際は千人程度のものであつたと思われる。但し、これらの礦頭は全て直接喬濟時の支配下にあつたというよりも、喬濟時を最も有力な礦頭の一人として指導性を與え盟主に仰いだ、というのが實情に近いと思われる。というのも、總頭領となる場合に「天罡星」という宗教的な權威が持ち出されているし、他に周一和のように同等の勢力をもつような「角腦」もいたからである。

既に述べたように、喬濟時案では礦徒と宗教結社という二つの系統の組織がみられた。<sup>(76)</sup>そして、礦徒の組織は日常の生

産關係のつながりにより形成され、その重要な位置には店戸のように商業發展の影響を反映したものが存在した。即ち山區で鑛山を經營するための食料、燃料（米・油）等の物資は自給できるものではなく、流通経路を握ることは鑛徒集團の規制についても大きな意味をもったと思われる。このように集團の形成の原理に新たな歴史的性格をおびた結合形態をもつ鑛徒集團に對し、宗教側は日常の「焚香拜斗」の様な活動に加わっていた鑛頭に合同・號令を與えることによって組織化を圖った。つまり、宗教結社はもともと鑛徒層を基盤として成立したのではなく、組織擴大の過程での蜂起を必然とする選擇と共に鑛徒集團への接觸を深めたといふことができる、その過程で鑛徒層は直接宗教側の影響下へ飛びこむのではなく、鑛徒集團全體として獨自性を保ち宗教結社との提攜をはかった。章煥の述べた「群妖群盜」の提攜はこのように組織が保持されておらねばならず、とくに鑛徒の場合には新たな歴史的性格をふまえたものであったといえよう。

### (三) 宗教的内容

喬濟時案にみられた宗教の基調は、非常に道教的なものである。例えば、初めに龔志尙が張麟に對して述べた語の中には太上眞君がみられたし、他にも紫陽眞君のような道教的神格や、拜斗という北斗の信仰、天罡星の信仰があった。これは「白蓮社會」と稱した宗教結社としては極めて特徴的なことである。<sup>(77)</sup>

即ち、隆慶五年五月、龔志尙は張麟に對して次のように説く。

あなたの様子は太上眞君によく似ている。ここではうまくいかないだろう。もし私の處へ來て人々と白蓮社會をつくれば、われらにみな好い運がめぐってくるだろう。<sup>(78)</sup>

ここで注目すべき點は、張麟が太上眞君に似ていることを強調して南陽で白蓮社會を起こそうとしていることである。太上眞君とは老子の神格化されたものであるが、この道教的な神格が白蓮社會と結びつけられ、さらに南陽では「太上眞君」と似ていることが何らかの宗教上の利點があつたとも解される點が興味深い。このことは、「白蓮教」と總稱されがちな

民間宗教の中には、道教的な要素が色濃くみられたものも存在し、さらにはある特定の信仰に對してはある特定の地域が親縁性をもつのではないかとさえ思わせる。<sup>(79)</sup>

そして、龔志尙は、もともとよく「做會喫齋」をしていたことを知っていた和福・和弼・盧貢元・郝曜らを張麟にひきあわせる。張麟は彼らに對し、

私は黃石公の遺した書をもっているが、その内容は、趙王の後裔が世に現れることとなっており、劉元豐と金盆李家の李姓のものが趙王を扶ける、というものであった。你らは直ちに會を立てて喫齋したならば、みな好き處を得るであらう。<sup>(80)</sup>

と説いた。黃石遺書というのは『漢書』卷四〇 張良傳にみえる下邳圯上で張良に兵書を授けた老人（濟北穀城山下の黃石）のことをふまえたものであらう。その中で、趙王後代の出世と劉元豐、金盆李家が趙王を扶助するという内容が説かれた。この趙王を宋朝の後裔と解する説もあるが未だ斷定は避けた<sup>(81)</sup>い。ただし、「金盆李家」の性格との關連や張麟が將來してきたこと等を考えると、この教説は元來北方に存在していたものであったと思われる。

金盆李家については、陝西長安縣の曲江村に奇瑞と共に出生したという李子龍なる人物の傳承があり、その傳承は華北を遊方していた道人の所持する「妖書」に傳えられていた。<sup>(82)</sup>李子龍は眞定の閒を往來したというが、他に金盆李氏を稱した山西靈石縣の李鐸と、<sup>(83)</sup>金盆李家後裔を稱した宣化府の李道明の例をみれば、金盆李家信仰はやはり北方系の信仰であったといえる。なお李道明は道士であったが、招かれて白蓮社をつくり、そこで金盆李家が稱えられたことが知られており、道教とも無關係ではなかったことを暗示させる。<sup>(84)</sup>

金盆李家の説かれた「妖書」は不明であるが、李子龍の事件と同時期の成化十一年（一四七五）に「妖賊」李能が「李家出世」を説いたことがあり、この事件には具體的な「妖書」も挙げられている。『皇明條法事類纂』卷三七 辯明冤法司凡遇刑獄有冤枉者即與辯理違者一體治罪例によれば、

丙申（成化十二）・丁酉の年、烟塵四散す、正に是れ末劫の年、李家出世せん。我に天分有り、就ち臨清に在りて起兵し、先ず糧道を截たん。二十八宿有りて我を助けん。

という妖言を説いて李能が「緊關周天烈火圖」を劉仁美に與えたとみえる。この劉仁美はのちに算命人の康文秀や山東東昌府武城縣民の于原が「于家出世」を唱えて起事をはかった事件に關與したが、その中で、康文秀は、于原に對して「今末劫の年がきた、你が起てば好漢が扶けるだろう」と述べている。<sup>(85)</sup>この事件では、周天烈火圖、金鎖洪楊大策、太上元天甲子顯明曆、龍鳳勘合、周天羅極龍華三會瑚璋如意勾籌印記圖、冥途路引など様々な「妖書圖記」が劉仁美の下から押收されている。これらの妖書は殆ど『憲宗實錄』卷一三六 成化十年十二月甲午に禁書としてみえるものであり、當時の宗教狀況を示している。右記のうち、早い例としては景泰二年（一四五二）の山西蔚州の吳伯通・郭福得の事件では「金鎖・玉蘭等書」がみられ、<sup>(88)</sup>やはり華北で廣くみられたものだったと思われる。先述の如く、金盆李家信仰は華北にみられたものであり、それと同時期に李能が「李家出世」を説いていること、「李家出世」や「于家出世」にみられた末劫思想や二十八宿と好漢の扶助という宗教的内容からみて、李能のいった「李家出世」が金盆李家信仰と同内容のものであり、そのなかに擧げられた「妖書」のいずれかに金盆李家の傳承が存在した可能性は大きい。

一方、喬濟時もはじめは龔志尙らとは別に、張四や劉住兒らと「附和妖言陰蓄異志」という行動をしていたようである。『萬曆武功錄』には「里中子周一和、濟時を導きて符術を習わしむ。符術成れば常に符を以て四壁を張り、自ら能く人を禍福すと言う」とあり、符術を中心としたものであったと思われる。やがて、喬濟時ら多數は宗教結社に加わり「俱隨會喫齋、號爲白蓮社會、日夜焚香拜斗」という行動がおこなわれるようになる。拜斗というの北斗を拜する儀式で、北斗は司命神として古くから信仰をあつめ、『道藏』の中にも『太上玄靈北斗本命延生真經』等の北斗信仰に關係する經典が多數存在する。<sup>(89)</sup>

さらに、張麟らは活動の活潑化をうけて教説を展開させ、

奉天承命の封號は天から授かった。民を水火の世から救い出そう。趙、李、劉、張の諸氏は創業の開基であり、ともに世業を扶けて富貴をうける。みなも公侯の位を得られん。青帝眞君、九土神君、紫陽眞君は助道の元勳である。<sup>(90)</sup>

と説く。ここでは明らかに道教的な神格が持ち出されており、他にも天命思想と末劫思想がうかがえる。この時期には喬濟時らの礦頭層と思われる信徒の参加が見られた。そのためか、それまでの「喫齋」から、蜂起を前提とする「救民出水火世」や「輩輩不失公侯之位」のような語がみられるようになる。水火の世と記される末劫の世に、青帝眞君・九土神君・紫陽眞君が現われて世界の變革を助けるというのである。青帝眞君とは五行の青を東方に配した五天帝の一つと考えられる。また紫陽眞君とは、紫陽眞人と呼ばれ『悟眞篇』の作者で所謂全眞教南宗の祖とされる張紫陽のことであろうか。ただし紫陽眞人の名號は他にも存在しており確定することはできない。<sup>(91)</sup> この中心にあるのはやはり「趙王出世」の觀念であり、右記の道教的神格は助道という副次的な役割を擔うにすぎないようにみうけられるが、その中では紫陽眞君が中心的な役割を擔っていたようで、各文書の押字（署名）には「紫陽眞君聖號」が用いられた。<sup>(92)</sup>

また、龔志尙らは礦徒組織のかかえ込みを圖り、喬濟時を「天罡星」と稱した。天罡星とは北斗のことであり、別の箇處では天下の元帥を頭領するという軍事面での中心的な役割が與えられている。<sup>(93)</sup>

これらの教義内容を具體的に表わす「妖書」は知られない。ただ、宗教組織の中核的位置を占めた和福の家から『百中經』『周易書』『天罡時籤簿』『九星流年』『周易訣書』各一本と籤筒一個が押收された。これは、喬濟時の家からは武器と『孫武子兵書』一本が押收されたにすぎないのと對照的である。このうち、『百中經』は『四庫全書總目提要』卷一一一子部 術數類存目にみえ、他の諸書も同様の性格の術數書であろうと思われる。『天罡時籤簿』などは、喬濟時が天罡星と稱されたことと無關係とは思われない。當時の宗教結社では寶卷とは別にこのような占書、術書も「妖書」の一つの中核を成していたといえる。

なお、喬濟時案における道教的な教説を考える上で注意すべきは、鑛夫や鍛冶屋の祖師が太上老君とされている點と、<sup>(94)</sup>



この河南南陽府近邊の宗教的風土である。

礦徒は「凡入穴必禱於神」<sup>(95)</sup>というように信心深い存在であり、宗教はその組織化に大きな意味をもったであろう。そしてその宗教的内容は礦徒らの祖師とされた太上老君に親縁なものであった。地域の宗教的な特性を示すものとしては南陽府のことではないが、河南での道教的名色彩をもった民衆反亂がある。元末の信寧信陽州の棒胡の亂では「李老君太子」<sup>(96)</sup>が稱されたし、崇禎二年（一六二九）には歸德府で「自號紫微星、有十八子當出御世之說」<sup>(97)</sup>をいう李愼吾の事件があった。また萬曆初の華北では道士朱質らの如き道教的名結社も盛行しており、喬濟時案も張麟が移ってきたことに示されるように當時の華北の状況と無縁ではなかった。そして、臨接する鄖陽府の均州には、北極眞武大帝を祀り、大嶽太和山ともよばれた道教の一大中心地武當山があり、諸方から遊方する者もあった。萬曆初には、太和山の道衆は二萬人を數えたといわれるが、<sup>(98)</sup>なかには様々な宗教者が存在していたようである。<sup>(99)</sup>また、正統八年（一四四三）には張端の如く均州で「紫微星降生」<sup>(100)</sup>と稱し亂を謀ったものもいた。<sup>(101)</sup>このようにみると喬濟時案の舞臺は比較的道教と関係があり、喬濟時案だけが特異な例を示したのではないと言えよう。

## 結 語

喬濟時・龔志尙らの活動した嘉靖末から萬曆初にかけて華北では種々の宗教活動が盛んであったが、喬濟時案もその刺激を受けて生じた事件であった。華北農村では生産力が低く小農民の經營基盤は弱いと言われ、<sup>(103)</sup>災害や差役の過重その他の原因で土地を流移する農民が多くみられた。鄖臺地區に流入した流民も概ねこうした出自をもつ人々であったが、成化の反亂以降も、流民發生の原因に對する根本的な處置は爲されなかった。先述の如く流民の移動は二、三人家族単位であり、地縁的血縁的關係から切離された存在であった。このような流民が求めた新たな連帶關係の一つとして、宗教が存在したと考えられる。既述の如く龔志尙の宗教組織には農村における共同體的關係から遊離した流民が存在し、また宗教派

が提攜の対象とした礦徒集團も流民と同様の出自をもつものであった。しかし、礦徒には生産のための組織が存在していた点で流民とは異なり、「群妖群盜合爲一途」というような提攜が可能となった。そして、この組織は銀流通や商品經濟の發展という歴史的背景によって獲られたという点で單なる群盜にはない新しさがみられる。明代後期には無賴・遊民と呼ばれる社會層の活動が活潑化し、なかには組織的な活動を營むものも現われた。無賴・遊民が組織を獲るには何らかの經濟的基盤が必要であるが、明代後期にみられた商品經濟發展がその基盤であつたといえる。<sup>(104)</sup>なかでも礦徒の場合はその歴史性は明確で、銀經濟の進展とそれによる銀の欲求が流民の山區開發を刺激し、王朝の規制外にあつて大いに問題となつた。さらに、その組織の重要な部分には店戸のように商品經濟發展の影響をうけた歴史的格をもつ存在もみられたのである。鈴木氏のいう民間武力派を考へる際には、この組織の形成のもつ意味を考へる必要がある。民間武力派とは王朝末期の混亂の產物で窮乏化した農村社會から析出されたものというが、<sup>(105)</sup>無賴的集團のなかには礦徒の例のように、超歴史的な王朝末期の混亂や窮乏した農村社會の產物とのみいぎれない新しい格をもつものも認められた。そして、明末の宗教的亂の多發の背景には章煥のいうような「群妖群盜」の提攜關係があり、そのなかには新たな歴史的格を持つて組織の獨自性を保持したものもみられたが、その新しさがまた宗教的亂の劃期的一端を説明しているのである。

## 註

- (1) 無爲教については、澤田瑞穂『羅祖の無爲教』（『増補寶卷の研究』所收 國書刊行會 一九七五、原載『東方宗教』一、二 一九五一、二）や、相田洋『羅教の成立とその展開』（『續中國民衆反亂の世界』所收 一九八三 汲古書院）などを参照。酒井忠夫『中國善書の研究』（弘文堂 一九六〇）第七章「明末における寶卷と無爲教」には明末の様々な宗教結社が擧げられている。
- (2) 『世宗實錄』卷四八六 嘉靖三十九年七月壬辰。また『皇明經世文編』卷二七一にも所收される。章煥は河南巡撫、總督漕運などを歴任し、中原の情勢に明るかつたと思われる。また、『世宗實錄』卷五六二 嘉靖四十五年九月己酉には、御史鮑承慶が同じく當時の狀況を「自來妖盜本爲一途」として説明している。
- (3) 鈴木中正『中國史における革命と宗教』（東京大學出版會 一九七四）六九頁、二九九頁。また、同編『千年王國の民衆運

動の研究』(東京大學出版會 一九八二) 八二、七八頁。

- (4) 鈴木氏は民間武力派の例として、山賊、水賊、群盜、私鹽、私鑄、阿片取扱人、博徒、逃兵、流民等を挙げた(前掲註(3) 編書八七頁)。

- (5) 無賴・遊民層の活動については、西村元照「明代中期の二大叛亂・解説」(谷川道雄・森正夫編『中國民衆叛亂史』二平凡社 一九七九)や、上田信「明末清初・江南の都市の『無賴』をめぐる社會關係」(『史學雜誌』九〇—一一 一九八一)、吉尾寛「明末流賊研究についての覺書」(『江南女子短期大學紀要』一二 一九八三)などを参照。

- (6) 撫治鄖陽都御史の設置については、『大明會典』卷二〇九都察院 督撫建置を参照。また『萬曆鄖臺志』卷三 憲體 勘割 戶部咨爲處流逋以定民志事に、嘉靖八年の撫治鄖陽都御史潘旦は次のようにこの地區の共通した性格を述べる。

臣撫屬之地、湖廣鄖陽府・荊州・襄陽、河南南陽、陝西漢中府・商州等處、乃萬山之中、三省之界、實流逋淵藪、歲豐則刀耕火種以避差、歲饑則嘯聚爭奪而爲盜。

- (7) 流民問題と荆襄の亂については、清水泰次「明代の流民と流賊」(『史學雜誌』四六—二、三 一九三五)、横田整三「明代における戸口の移動現象について・上」(『東洋學報』二六— 一九三八)、谷口規矩雄「明代中期荆襄地帶農民反亂の一面」(『研究』三五 一九六五)、賴家度「明代鄖陽農民起義」(湖北人民出版社 一九五六)などを参照。

- (8) 横田前掲註(7) 論文。

- (9) 『皇明經世文編』卷九三。

- (10) 馬文昇「端肅奏議」(『四庫全書珍本』五集) 卷二 巡撫事。

- (11) 横田前掲註(7) 論文参照。

- (12) 樊樹志「明代荆襄流民與棚民」(『中國史研究』一九八〇—三)。

- (13) 『皇明經世文編』卷三九。

- (14) 『憲宗實錄』卷二五 成化二年正月癸亥。

- (15) 『太宗實錄』卷一九七 永樂十六年二月癸巳。

- (16) 楊一清「關中奏議」(『四庫全書珍本』五集) 卷一六 爲禁約妖人邪術扇惑愚民貽患地方事。

- (17) 『皇明經世文編』卷八一。

- (18) 『明律國字解』卷一一 禮律一 同條。なお、特に山西出身のものが端公と呼ばれている點が興味深い。嘉靖五年の白蓮教の大獄事件で有名な李福達(李五)の祖が、同じく山西出身であり幻術を以て荆襄の亂に加わっていることから、實際に鄖臺地區での活動が確認できるからである。徐學聚『國朝典彙』卷一六四 妖賊。

初成化間、劉千斤・石和尚、相繼作亂。皆山西李姓者、以幻妄之術佐佑之。及劉・石敗、李挾重資遁走。至是其孫李五、世習幻術、復來延安府地方。

- (19) 『世宗實錄』卷一一 嘉靖元年三月癸亥、張佳胤「居來先生集」卷五二 書牘 上陳趙二相公論盜賊、『萬曆鄖臺志』卷四 宦蹟 政事などを参照。

- (20) 『皇明經世文編』卷三九。

- (21) 『皇明經世文編』卷四六。

- (22) 『皇明經世文編』卷九三。

合將近年逃來、不曾置有產業、原籍田產尙存流民戴廣等共一萬六千六百六十三戶、男婦共四萬五千八百九十二丁口、并平昔兇惡、斷發原籍者、照例遣回。其本分營生流民張清等共九萬六千六百五十四戶、男婦共三十九萬二千七百五十二丁口、仰遵聖諭、編附各該州縣戶籍、應當糧差、仍嚴立禁條、用杜將來流徙。

(23) 『武宗實錄』卷一一 正德元年三月辛丑。

(24) 『萬曆邸臺志』卷一〇 著述下 王從善 都御史徐著去思碑記。

(25) 『萬曆邸臺志』卷三 憲體 敕諭 敕都御史徐著。

其其次清查、編合三五姓爲一戶、今丁多產厚、願分析者、審其真正姓名、別立戶籍、一體當差。或有私自朋合影射者、查明改正、其無田產、願還鄉者、給引照回仍移文原籍官司、存恤優免糧差一年、公私債負悉與蠲除、不許逼迫再致逃竄。なお朋戸については、谷口前掲註(7)論文、眞田武彦「明代正德期における藍廷瑞の亂について」(『東洋大學東洋史研究報告』三一 一九八四)等参照。

(26) 『皇明經世文編』卷七二 丘濬 屯田。

(27) 『憲宗實錄』卷一六七 成化十三年六月丙申。

凡招流民、以戶計十九萬一百七十有奇、墾荒田、以頃計一萬四千三百有奇。

(28) 『皇明經世文編』卷四六。

(29) 註(25)史料に同じ。

(30) 徐學謨『徐氏海隅集』外編卷六 議處均州事宜狀。

(31) 『皇明經世文編』卷三四二。

(32) 王士性『廣志繹』卷三。

惟南陽・泌・清諸水、皆南自入漢、若與中州無涉者。然舟楫商賈、反因以爲利。

(33) 明代の銀鑛業や礦徒については、梁方仲「明代銀鑛考」『中國社會經濟史集刊』六一 一九三九、白壽彝「明代礦業的發展」『學步集』生活・讀書・新知三聯書店 一九六二、原載『北京師範大學學報』一九五六一、李龍潛「試論明代礦工運動的反抗鬭爭」『史學月刊』一九五九一三)等参照。また、沈定平「明中葉以後生產力和生產關係矛盾的尖銳化與明末農民大起義」(『中國農民戰爭史論叢』一 山西人民出版社 一九七九)は、明末農民反亂との關係でも礦徒は注目すべきだという。資本主義萌芽論のみならず、農民反亂における非農民層の存在を如何に評價するかとの問題とも關係して、礦徒はさらに追求すべきものの一つであろう。なお、前掲梁方仲論文は特に銀鑛の利が大きかったために法禁が厳しかったという。礦徒の利が大きかったことは、瞿九思『萬曆武功錄』卷一 河南

礦盜王西庵鹽盜塗四列傳に、

王西庵廼與蔣四嘆曰、子試度礦孰與鹽。四曰、礦利、鹽亦利、利等耳。顧礦利大、鹽利微。然此時則無隸於鹽者矣。とあることから推測できよう。

(34) 礦徒の見える早い例として、顧炎武『天下郡國利病書』原編第二三冊 江西 五一葉 上饒知縣李鴻封禁考略には「永樂宣德間鑛徒入山」とある。

(35) 『明史』卷八一 食貨志五 錢鈔。

(36) 王圻『續文獻通考』卷二七 金銀課。

## (37) 『四友齋叢說』卷一三 史九。

自四五十年來、賦稅日增、繇役日重、民命不堪、遂皆遷業。

……昔日逐末之人尙少、今去農而改業爲工商者、三倍於前矣。昔日原無遊手之人、今去農而遊手趁食者、又十之二三矣。大抵以十分百姓言之、已六七分去農。

## (38) 李洵『試論明代的流民問題』『社會科學輯刊』一九八〇—

三)

## (39) 『神宗實錄』卷三三六 萬曆十九年五月乙丑。

先是、五臺礦盜張守清、自開礦洞、招納亡命三千餘衆、設立頭子二百餘名、締婚代藩潞城・新寧二王、勢甚張大。礦徒不遵約束者、立斃杖下、遠近村落、咸懼其焰。

酒井前掲註(1)書一六四頁參照。なお、張守清については瞿九思『萬曆武功錄』卷一 山西 礦盜張守清列傳、張萱『西園聞見錄』卷九二 坑冶等にも記事がある。

## (40) 王士性『廣志釋』卷五。

## (41) 『英宗實錄』卷二二九 正統十年五月己亥。

四川會川衛前所舍人陳武葵、指揮李淳、朋合勢豪、聚集軍囚夷獠一千餘人、于密勒山銀場、空開官洞、取礦煎銀。私立主事・行市・掌事、并千百長名色、持兵放銃、嘯聚山林、漸成耗叛。

## (42) 瞿九思前掲註(39)書。

## (43) 『世宗實錄』卷一九四 嘉靖十五年十二月乙酉。

## (44) 『崇禎義烏縣志』卷八 時務書 礦防

嘉靖三十七年、永康鹽商施文六、載鹽過閭里、熟睨八寶山之麓一帶小山、土色照耀產礦、輒起盜心、乃構黨方希六等九十

餘人、繇楓坑到山密掘。

## (45) 『萬曆疏鈔』卷二九 礦稅類 馬鳴鑾 開礦事在必行敬愚慮以備採擇疏。

(46) なお清代の例では、吳其濬『滇南礦廠圖略』卷上 附浪窩王崧礦廠採煉篇に、

凡廠之初開也、不過數十人、裹糧結棚而棲、日炊房。所重者油米、油以然鑪、米以造飯也。四方之民、入廠謀生、謂之走廠。久之由寡而漸衆。

というような記事がある。

## (47) 例えば、前掲註(46)書 卷上 丁第九。

曰鑪頭、熟識鑛性、語練配煎、守視火候。無論銀銅、鑪戸之虧成在其掌握。硿之要在鑪頭、鑪之要在鑪戸。

(48) 宋應星『天工開物』卷一四 五金 陸容『菽園雜記』卷一四などの外、謝國楨編『明代社會經濟史料選編』上(福建人民出版社 一九八〇)所引の諸史料等參照。

## (49) 『嘉靖徽州府志』卷七 食貨 一四葉(『明代方志選』(一) 學生書局 一九六五)。

凡取礦先認地脈、租賃他人之山。穿山入穴深數丈、遠或至一里、礦盡、又穿他穴。凡入穴、必禱于神、或不幸而覆壓者有之。既得礦、必先享煉、然後入爐。煽者、看者、上礦者、取鈎沙者、煉生者、而各有其任、晝夜番換、約四五十人。若取礦之夫、造炭之夫、又不止是。故一爐之起、厥費亦重。

公認の鐵爐から礦徒の生産形態を類推するのは、問題もあろうが、とりあえず、具體的に當時の生産工程とその規模を知ることのできるものとして例示しておく。

(50) 何喬新『椒丘文集』卷三二 奏議集略。

(51) 註(45)に同じ。

(52) 楊嗣昌『楊文弱先生集』卷二二 遵旨確查開採疏。

先令該縣編定礦甲、凡若干名、各給印帖爲照、後聽礦甲自募礦夫。每一甲首爲之限制、一夫不得過五百人。

なお、この史料は吉尾寛氏の御教示による。

(53) 王廷相『王氏家藏集』卷二六 雜文 上巡撫陳公治盜議。

(54) 註(45)に同じ。

(55) 賴家度前揭註(7)書 二六頁。

(56) 『皇明經世文編』卷四六。

(57) 喬濟時案の中でも、喬濟時らが蜂起の爲の武器を鐵匠にくらせた際に「指以竊礦爲名」とあるように、近邊には礦徒のために器具を製造修理する鐵匠がいたことと思われる(徐學謨後註(60)史料参照)。

(58) 毛葫蘆については、顧炎武『日知錄』卷二九 毛葫蘆兵を參照。角腦は他に脚腦(『乾隆盧氏縣志』卷三 礦洞)や埵腦(馬鳴鑾註(45)疏)とも記されたようである。

(59) 『大明一統文武諸司衙門官制』は、萬曆中寶善堂刊本に據る。通行の嘉靖二十年刊本(學生書局景印、明代史籍彙刊)には、寶善堂刊本にみえる衙門の添設裁革や地方の繁簡衝僻、風俗についての記事はなく、寶善堂刊本は有用である。卷首の凡例には、

遵照大明會典、一統志、廣輿圖諸書、及見行事宜、參互攷校采輯、成編彙梓、以廣其傳。

とあり、増輯の經緯が知られる。なお、校正の陶承慶は江西新

喻縣縣丞で、他に『新刻京本華夷風物商程一覽』の撰者としても知られ、當時の實用書の著者の性格を伺わせて興味深い。

(60) 喬濟時案についての記述は、主としてこの徐學謨の題南陽府提獲妖逆喬濟時疏により、特に註記しないかぎりこれによるものとする。

(61) 桐柏山區は禁山區とされていた(賴家度前揭註(7)書一八頁)。なお、瞿九思『萬曆武功錄』卷一 河南 白蓮教喬濟時書希列傳は「已爲巡徼老人、給事縣庭中、因盜竊礦沙以爲務」と記す。

(62) 酒井前揭註(1)書 四六四頁。

(63) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

各又不合帶領王恭、聽從跟隨、與王友・郭萬枝・梁醜兒數十餘人、俱到周一和山庄屯住。

(64) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

今據、查估濟時家產生畜、共銀一百五十四兩九錢七分一釐五毫、不足原示賞格之數。

(65) 澤田瑞穂『校注破邪詳辯』(道教刊行會 一九七二)は「對合同」を入信誓約書と入信許可證の意に解す(六三頁)。また、合同・號令の授與は鈴木中正氏のいう宗教結社の加入形態のなかの割旗受領型に類似したもので、結合形態としては緩やかなものと思われる。鈴木氏は割旗の授與を軍事的指揮權の分與と解すが(鈴木編前揭註(3)書一六四頁)、この場合には未來の「公侯之位」がそれに對應するものであろう。

(66) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

隆慶五年八月内、郝曜又不合妄擬妖書一紙、付與前案已問徒

鄭虎、除禳疾病。

(67) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

王友當將地土典賣、得黃絹一丈五尺、與趙惟禮、拏送和弼。

(68) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

後有四川泰山廟前案未獲羅道士、卽羅中川、遊方前來相遇。

龔志尙、訪知羅中川亦曉妖術、將伊引到和弼家、說知趙王出世前情。羅中川亦不合假說、我本處三寨上、有許多人、儘

好立會。待有與頭、我來會你。

(69) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

龔志尙、因濟時素慣竊礦、手下群黨甚多、欲要推爲領袖。又不合令伊前案未獲大徒弟唐縣人趙惟禮、不合聽從、前到平市店、尋問濟時不遇。隨向濟時手下後故火夫王文慶、稱說、如

今趙王出世、俺長頭張老爺傳說、喬老人是天罡星、頭領使我來會他、領兵起手、迎接趙王。比王國瑞在彼、不知濟時亦隨

白蓮教社喫齋情由。向趙惟禮回說、只怕他不信、還將你拏

了。趙惟禮聽說回走。

(70) 鈴木編前揭註(3)書二七七頁。

(71) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

龔志尙・屈眞全、各又不合向濟時稱說、待羅中川旗到之日、

和弼・陳大邦等一股、在鎮平起手。樂時貴・黃古倉等一股、

在唐縣南起手。梁國才等一股、在隱山南祖師廟起手。濟時與

周一和等一股、在平市店起手。千頃・潘禿子等一股、在舞陽

縣起手。待正月十六日川兵旗到、齊上潼關、迎接趙王等情。

(72) 『萬曆武功錄』卷一 河南 白蓮教喬濟時曹衛列傳。

(73) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

濟時又不合與張仲仕、令劉大全、亦不合聽從、出豬一口、周

一和出羊一隻、在平市店、假以還願宰殺、當在張仲仕家、置

辦酒席、令劉住兒……各聽從邀請安章正・安孔性・任和尚

……俱到張仲仕家喫會。

(74) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

濟時又不合向安章正等商謀傳說、我領合同・號令、爲總頭目。

待至二月十五日起手、上潼關、迎接趙王。你們都要齊心扶

持、共成好事等語。

(75) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

張老爺號令說、你(喬)是天罡星、頭領天下元帥。你有三千

礦兵、如今和弼糾人分投起手、迎接趙王。你可共成好事。

(76) 酒井忠夫氏は、「妖逆喬濟時」の黨は礦徒よりなっていて、

白蓮教社の下部組織をなしていた、という評價をしている(前

註(62))。しかし、宗教結社は合同の付與などにより礦頭層の

とりこみを圖つたが、末端の礦徒にまで直接の影響をもってい

たわけではなく、礦徒層への影響は礦頭を介しての間接的なも

のであった。この形態を下部組織であったといえなくもない

が、未だ一般の礦徒までを自らの宗教性によって直接教化、組

織をしたとは言ひ難い。現實に礦徒という形で生業を営んでお

り、それだけに却って日常的な關係による規定を強く受けたと

思われる。即ち、礦徒集團の内部はその獨自の論理により形成

されており、獨自性を保持しつつ宗教結社と提携したといえよ

う。

(77) 道教的神格が寶卷類にまみみられたり、反亂の場合にも李

老君や眞人が稱えられたことがあったように、民衆宗教に道教

的要素がみられるのはごく自然なことであるが、ただここでは、白蓮教という稱謂によって佛教的な内容しかもたないと思えるのは危険であることを指摘しておく。

(78) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

襲志尚、向張麟商說、你這模樣、好似太上真君。你這裏沒些生意。若跟我到俺本處、惑誘人家、起一白蓮社會。日後咱們都有好處等語。

(79) 野口鐵郎「明清時代の白蓮教」(『歴史教育』二二—九一—九六四)は喬濟時案の太上真君にも觸れているが、崇拜對象の多様性について、本質的にはメシア待望理念を盛り込んだもので、その他の民衆に知名であり、かつそれなりの變革性を具備した神格が、民衆の現世的利益追求の態度によって求められたにすぎないという。

(80) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

我有黃石遺書、內載、趙王後代今該出世、有劉元豐、金盆李家姓李的、扶助趙王。你們趁早立會、約衆喫齋、都有好處等語。なお黃石公に關係した書は兵書や術數書にいくつかみられる。例えば『四庫全書總目提要』卷一一〇 子部 術數類存目には『黃石公行營妙法』三卷なるものがみえる。

(81) 川勝守「明末、南京兵士の叛亂」(『星博士退官記念中國史論集』一九七八)。

(82) 『憲宗實錄』卷一五七 成化十二年九月己酉。

妖人李子龍等伏誅。子龍本姓侯名得權、保定易州民。幼名立柱兒、爲狼山廣壽寺僧、更名明果。稍長。遊方至河南少林寺。遇術士江朝、推其命後當極貴。又遇道人田道眞傳與妖

書。有云陝西長安縣曲江村金盆李家、有母孕十四月生男、名子龍。有紅光滿室、白蛇盤繞之異。得權得其說、遂更名子龍、蓄髮往來眞定間、交結不逞之徒。又有術士黑山者、批其命、若遇猴鷄鳳凰交之語。得權以與朝所言符、信之。

また、查繼佐『罪惟錄』傳三一 李子龍には、「又有日者黑山、僞批有云遇猴鷄鳳凰變等語」とあり、末尾に「論曰、猴鷄變鳳凰、此妖也」という。なお、この「金盆」が如何なる意味をもつかは不明であるが、劉枝萬『中國道教の祭りと信仰』下(櫻楓社 一九八四)は、投胎橋の説明に『臨水平妖傳』一七回流血淚重會百花橋の一節を引用するが、その中には「金盆送子高元帥」(金盆もて子を送る高元帥)なるものがみえ(三八〇頁)、「金盆」とは投胎の觀念に關係したものであったと思われる。なお、沈定平「明末「十八子主神器」源流考」(『明史研究論叢』一 江蘇人民出版社 一九八二)は、明末の李自成の亂の際にみられた「十八子の讖」の淵源を考察しようとしたものであるが、金盆李家信仰には觸れられない。

(83) 『憲宗實錄』卷一二五 成化十年二月乙亥。

(84) 『孝宗實錄』卷二〇六 弘治十七年十二月辛丑。

誅妖人李道明、治告反不實之罪。道明山西應州人、幼爲道士、住宣府白家泉長生觀。忻州人樊二漢等、尊信之、因迎致道明、會聚燒香、爲白蓮社。道明又自稱金盆李家後裔、撰妖詞、歌唱惑人。

(85) 『皇明條法事類纂』卷三七 辯明冤 法司凡遇刑獄有冤枉者即與辯理違者一體治罪例。

(子) 原有一人之分。我尋你六七年。你正使(是?) 東南第



一枝。于家出世。如今末劫年成（程？）到了。你若起手時、自有好漢扶助。你去尋幾箇好漢來、與你計較。

なお于原・康文秀については『憲宗實錄』卷一六四 成化十三年三月乙亥に記事がみえる。

(86) 冥途路引については、大淵忍爾編『中國人の宗教儀禮』（福武書店 一九八三）四七二、八二四頁等参照。

(87) 同じ禁書の書目は『皇明條法事類纂』卷三二 造妖書妖言申明禁約妖書妖言例や『國朝典彙』卷一六四 妖賊、朱國禎『湧幢小品』卷三二 妖人物にもみえる。

(88) 『英宗實錄』卷二〇七 景泰二年八月庚辰。

(89) 拜斗については大淵編前掲註(86) 書 六八八、六九八、八五二頁等参照。北斗信仰については、『道教』（平河出版社 一九八三）第二卷 道教の展開 三三四頁参照。

(90) 題南陽府提獲妖逆喬濟時疏。

張麟・龔志尙、各又不合在於和弼家、捏寫妄誕妖言。內云、奉天承命封號、既授於天、福壽永昌。既治天下有道、治國有功。扶世盤石、救民出水火世。豐頭疊肋、相同中元。走肖・木子・金刀・弓長、創業開基、同扶世業、齊受富貴、共享太平之樂、輩輩不失公侯之位。青帝眞君・九土神君・紫陽眞君、助道元勳。各套畫押字紫陽眞君聖號、用銀硃圖記鈐蓋。

(91) 李叔還編『道教大辭典』（巨流圖書公司 一九七九）。

(92) このように世界變革に際して眞君が現われるという圖式は道教的メシア思想である「太平眞君李弘」の信仰を想起させて興味深い。なお、太平眞君李弘については、砂山稔「李弘から寇謙之へ」（『集刊東洋學』二六 一九七二）、麥谷邦夫「初期

道教における救済思想」（『東洋文化』五七 一九七九）、Anna K. Seidel, The Image of the Perfect Ruler in Early Taoist Messianism : Lao-Tzu and Li-Hung, *History of Religions* Vol. 9—2 & 3, (1969—70) などを参照。

(93) 註(75)を参照。なお、他に天罡星と稱したものに順治二年（一六四五）の宣府の劉伯泗の例がある。謝國楨編『清初農民起義資料輯錄』（新知識出版社 一九五六）七二頁参照。

(94) 窪德忠『道教史』（山川出版社 一九七七）三八三頁、仁井田陞『中國の社會とギルド』（岩波書店 一九五一）七六頁。

(95) 註(49)参照。

(96) 『元史』卷一八二 許有壬傳。

(97) 吳姓『柴菴疏集』卷五 流妖煽惑可虞疏。なお、紫微星とは北極星を神格化した北極紫微大帝のことと思われる（大淵前掲註(86) 書一九五頁）。

(98) 『萬曆武功錄』卷一 北直隸 王善列傳、河南 曹崙列傳。

(99) 武當山については、関野潛龍『明代文化史研究』（同朋舎 一九七九）第四章 明代の道教と宦官。石田憲司「太和山の『佃田』形成」（『史境』五 一九八二）等参照。

(100) 『徐氏海隅集』外編卷六 議處均州事宜狀。

(101) 例えば、『萬曆武功錄』卷六 貴州 王之佐列傳など。

(102) 『英宗實錄』卷一〇 正統八年十一月辛未。

(103) 片岡芝子「華北の土地所有と一條鞭法」（『清水博士追悼記念明代史論叢』 一九六二）。

(104) 上田前掲註(5) 論文。

(105) 註(3)に同じ。

## **A STUDY OF LATE MING RELIGIOUS REBELLIONS**

### **— the cooperation between miners illegally extracting silver and a religious association**

OSAWA Akihiro

The present study treats the 1577 incident involving Qiao Jishi 喬濟時 where a group of miners illegally extracting silver in the border area of Nanyang 南陽 prefecture in Henan cooperated with a religious organization in planning insurrection. In it I wish to explore the development of late Ming popular religious movements from the perspective of their historical background. Nanyang, the stage for the Qiao Jishi incident, was an area into which vagrants had moved since the middle of the Ming dynasty and, furthermore, it was an area where the illicit mining of silver was rampant. For this reason there were also persons who were not peasants among those who belonged to the local religious associations and among these were also silver miners. In this we see a novel element which had arisen from the historical background of the development of a commodity economy and the growth of the circulation of silver during the Ming dynasty. The silver miners were different from the vagrants in that they were organized according to principles derived from the productive activity they engaged in, a fact that made possible their organized cooperation with a religious organization. Such cooperation occurred in a period with a high frequency of religious rebellions, but the relations among groups participating in the rebellions at the end of the Ming were also, as can be seen from the example of the silver miners, a result of the social changes that had occurred during the Ming and it shows that a new historical background existed for the epochal development of popular religious rebellions at the end of the Ming dynasty.